

本会の動き

2015年度部会活動功労賞 (部会CT賞)

The Award for Distinguished Service to SCEJ Divisional Activity

[部会CT賞表彰にあたって] (成瀬一郎 部会CT長)

化学工学会では、基盤技術分野として6部会および展開技術分野として8部会がそれぞれ横系および縦系として各学問分野での専門家集団を形成し、その分野の学会代表として積極的な活動を行っております。また、国際的にも我が国の研究者集団の代表として国際シンポジウムの開催を行う等、積極的に寄与致しております。このような部会活動は部会員の皆様の御努力によって支えられておりますが、特に若手会員の不断の貢献に因るものが大であります。この貢献に少しでも報いるべく2010年度より部会活動功労賞として部会CT賞が設けられました。

今回で6回目の表彰となりますが、今回から貢献された個人のみならずグループにも表彰できる仕組みを整えました。本年度は、企画、運営等の部会活動の活性化に大きく貢献された以下の1グループならびに2名の方を受賞者として選定致しました。受賞者への表彰は、2016年3月に関西大学で開催されました年会初日の開会式にて行われました。受賞者のこれまでの献身的な貢献に感謝するとともに、今後も部会を始め化学工学会の諸活動に御支援賜りたく、ここにお願ひ申し上げる次第でございます。

最後に、この度受賞されました1グループおよび2名の皆様に、心よりお祝いを申し上げます。

(以下、受賞者五十音順)

材料・界面部会における

材料化学システム工学討論会の立ち上げ及び運営

材料化学システム工学討論会実行委員会

構成メンバー：稲澤 晋 氏(東京農工大学)

大柴 雄平 氏(東京工業大学)

【材料・界面部会】

学会の発展には、特に若手研究者同士が活発に議論をし、交流を深める活動の場が不可欠です。材料・界面部会では、若手研究者が自発的に立ち上げ、企画・運営をしている「材料化学システム工学討論会」がこの役割を果たしています。本討論会は、高分子に関する研究を俯瞰的に議論する目的で材料・界面部会が主催して

きた「高分子俯瞰シンポジウム」を若手研究者が発展的に改編し、2009年から毎年、若手グループにより開催されている討論会です。議論の対象は限定せず、基礎物性から、機能材料の合成や集積化、アプリケーションに至るまで、材料・界面に関わる事象について化学工学的な視点で深く議論することを目的としています。特に、2011年以降は、いわゆる学会発表のスタイルをやめ、若手研究者が議論を行える討論会としました。具体的には、講演者数を絞り、講演者1人あたり発表1時間、質疑応答50分とし、議論と意見交換の場を提供しています。若手研究者が「学会発表の形骸化」を危惧し、新たな試みとして徹底した討論の場を設け、厳しい質疑だけにとどまらず化学工学会における材料・界面研究の方向性をも議論することにより、部会活動の活性化にも貢献しています。

通常の討論会では、参加者が固定されがちですが、本討論会では候補者を含めた若手実行委員会が企画・運営を行い、討論会ごとに新規の参加者を呼び込み、若手研究者の「横のつながり」を広げる場として機能しています。新規参加者は、材料・界面部会に限らず、部会を越えて集まり、グループを拡大しています。

また、本討論会は、近い将来に若手研究者となる博士課程の学生にも発表の機会を提供し、学位を取得する前から、人的な交流を深める場としても機能しています。本討論会で発表した学生が大学等でポジションを得て正会員となったうえで、実行委員に加わるという好循環も既に始まっています。学会の将来を担う人材の育成、世代をまたいだ「縦のつながり」の深化は、学会にとっても重要な課題です。本討論会は、部会が、或いは、若手研究者自身が、大学・研究室の枠にとらわれず将来の若手研究者を育てる場としても機能しており、将来的な部会活動の活性化につながっていくと確信しています。

このように、若手研究者の「交流・議論の場」として活発な活動がなされていることに加えて、長期的な視点に立って、研究者の卵である博士課程の学生の育成に若手研究者が関わる場としても寄与していることから、本討論会が「縦・横のつながり」を広げ、部会活動の活性化に顕著な貢献をしていることが認められます。さらに、この活動が材料・界面部会にとどまらず部会を超えた交流に発展し、若手研究者による大会シンポジウム運営など、本学会活動へ波及することを期待しています。

今回はグループによる業績に対する推薦ですが、構成員として氏名を記載した2名は、化学工学会材料・界面部会に所属する40才以下の若手研究者であり、本討論会の立ち上げと運営に尽力をしてきました。個々人の寄与を以下に示します。

稲澤晋氏は、本討論会を徹底的な議論を行える場へと変革した2011年の討論会の主オーガナイザーを務め、新形式への移行において中心的役割を果たしました。また、それ以降も実行委員として、本討論会が若手研究者の「横のつながり」を広げる交流・議論の場として機能するよう運営に尽力してきました。

大柴雄平氏は、本年度(2016年)の討論会で主オーガナイザーを



右：稲澤 晋氏
中央：大柴 雄平氏
左：成瀬 一郎 部会CT長

務め、また、2012年の討論会で大学院生として発表を行い、助教の職を得た後に実行委員会へ加わり、学生の立場で参加した経験を踏まえて、世代をまたいだ「縦のつながり」を深める運営に貢献しています。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。

米国化学工学会(AIChE)年会におけるセッション運営および
超臨界流体部会／材料・合成分科会での
企画・活動における顕著な貢献

下山 裕介 氏(東京工業大学)

【超臨界流体部会】

下山氏は、超臨界流体部会に所属しており、超臨界流体に関する基礎物性ならびに超臨界流体を利用した材料技術に関する研究を通して、[1] 国際会議でのセッション運営、[2] 超臨界流体部会の新しい分科会における企画・活動に関して、部会活動の活性化において顕著に貢献してされました。

【1】国際会議でのセッション運営

米国化学工学会年会(AIChE Annual Meeting)は、毎年アメリカ合衆国の各都市で開催され、世界各国から研究者が多数参加し、化学工学分野において、最も大規模な国際会議の一つです。2011年10月16～21日には、Minneapolis Convention Center (Minneapolis, Minnesota)にて、2012年10月28日～11月2日には、David Lawrence Convention Center (Pittsburgh, Pennsylvania)にて開催されました。下山氏は、2011、2012年の2年間において、“Thermodynamics and Transport Properties (熱力学物性・輸送物性)”セッションのco-Chairを務め、セッション運営におけるプログラム編成、招待講演者の選定、発表当日の司会に携わってされました。プログラム編成、ならびに招待講演者の選定では、特に、超臨界流体系の物

性推算に利用される状態方程式の開発に関する研究分野を担当されました。このように、世界的に大規模な国際会議である米国化学工学会において、“Thermodynamics and Transport Properties (熱力学物性・輸送物性)”セッション運営に携わったことは、超臨界流体系の基礎物性に関する研究を中心とした、超臨界流体部会の活性化に大きく貢献するものと期待できます。

また、下山氏は、3年に1度国内で開催されている国際シンポジウム“Molecular Thermodynamics and Molecular Simulation”において、2009年、2012年、2015年の3回にわたり、超臨界流体部会からOrganizing Committeeとして参加し、海外からの参加者等の会場案内や、講演座長を務める等、シンポジウムの円滑な運営に大きく貢献してられました。

以上のように、米国化学工学会年会におけるセッション運営を中心とした、国際会議での運営に関する貢献は、超臨界流体部会が今後の目的として示している「国際性の強化」への大きな貢献が考えられ、超臨界流体部会の活性化への展開が期待できます。

【2】超臨界流体部会の新しい分科会における企画・活動

超臨界流体部会では、2014年度に、4つの分科会が新しく編成され、下山氏はこの分科会の1つである「材料・合成分科会」の会長を務めています。ここで下山氏は、超臨界流体技術を研究する若手研究者を分科会幹事として加え、新しく編成された材料・合成分科会を発足させました。2015年8月10～11日に開催された「第14回超臨界流体部会サマースクール」では、材料・合成分科会により企画され、下山氏が中心となり、日時・場所の設定、講演内容ならびに講師の選定といった企画運営の全般を担われました。特に、講演内容ならびに講師の選定においては、超臨界流体を利用した材料・合成技術に関する講演に加え、これまでに超臨界流体部会主催でのシンポジウムやセッションにおいて、講演されていない研究に関する講演をも企画されました。現在、超臨界流体部会では、他の関連学会・部会等との連携を強く意識した部会の活性化を図っています。このような下山氏が、企画した「第14回超臨界流体部会サマースクール」における講演を通じて、化学工学会以外の学会・研究会を主とし、超臨界流体技術に携わる研究者との連携が強化されるものと期待できます。

また下山氏は、化学工学会内における基礎物性部会、反応工学部会／CVD反応分科会の2つの部会・分科会においても幹事を務めており、これまでに、化学工学会第43回秋季大会における「重臨界・超臨界流体技術を支える最新の基礎物性研究」シンポジウム(2011年)、ならびに化学工学会第45回秋季大会における「次世代技術を担う最新の基礎物性研究」・「CVD・ドライプロセス-構造・機能制御の反応工学-」シンポジウム(2013年)において、2つの部会・分科会との共催シンポジウムのオーガナイザーを務め、企画・運営を遂行してられました。

以上のように、新しく発足した材料・合成分科会での企画・活動、ならびに他の部会・分科会との共催シンポジウムにおける企画運営は、超臨界流体部会における基本方針である「他の関連学会・部



右：下山 裕介 氏
左：成瀬 一郎 部会CT長



右：西浜 章平 氏
左：成瀬 一郎 部会CT長

会等との連携強化」への大きな貢献が考えられ、超臨界流体部会の活性化への展開が期待できます。

下山氏がこれまで活動してきた [1], [2] の貢献は、超臨界流体部会が今後の方針として掲げている「国際性の強化」と「他の関連学会・部会等との連携強化」への貢献は卓越しており、今後の超臨界流体部会の活性へつながるものと大いに期待できます。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。

**分離プロセス部会における
国際シンポジウムの運営と部会活性化への顕著な貢献**

西浜 章平 氏(北九州市立大学)

【分離プロセス部会】

西浜氏は、分離プロセス部会において、以下のように、部会の活性化ならびに庶務活動、および部会の国際化について多大な貢献をされました。

西浜氏は2011年度から2014年度において、分離プロセス部会の幹事を務められました。特に、2013年度から2014年度においては、部会の庶務幹事を務められました。この2年間に於いては、松本道明前部会長(同志社大学)の下、部会運営の取りまとめが行われました。分離プロセス部会では、「基礎講座」、「最新技術講座」、「講

演会および見学会」、「秋季大会シンポジウム」の4つの主要行事を推し進めており、西浜氏は、これらの部会活動が恙なく遂行されるよう基盤構築に尽力されました。また、部会内の5つの分科会(膜工学分科会、固液分離分科会、蒸留分科会、吸着・イオン交換分科会、抽出分科会)の交流を促進する役割も担っていただきました。加えて、年2回の部会幹事会においては、部会全体の資料作成や議事進行などについて中心的に業務を進められ、広報活動においては、大島達也前広報幹事(宮崎大学)と共に、部会の主要行事等の会告や報告書の取りまとめ、ならびにウェブサイトやニュースレターでの公開を行い、部会情報の継続的な発信を支えられました。以上の様に、西浜氏は分離プロセス部会の活性化ならびに庶務活動において顕著な貢献をされました。

さらに、西浜氏は、第79年会(岐阜大学、2014年)にて開催された国際シンポジウム「二酸化炭素の固定化・有効利用と分離技術」のオーガナイザーを務められました。ここでは、国際シンポジウムの企画立案、講演者の選定、座長の選定、ならびにシンポジウム開催に関わる事務局作業を精力的に行われました。本シンポジウムでは、海外から2名の招待講演者、国内から3名の依頼講演者による5件の講演が行われ、最大で100名を超える研究者が参加し、加えて非常に活発な質疑応答もなされ、国際シンポジウムとして大成功を収めることができました。これは、分離プロセス部会において、初めての国際シンポジウムであり、部会の国際化への貢献は多大であったと考えられます。

以上の理由により、部会CT賞の受賞に相応しいと認められました。